



Title	在日韓国人青年のエスニシティ形成に関する社会学的研究
Author(s)	金, 明秀
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40102
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	金 明 秀
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 12908 号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	在日韓国人青年のエスニシティ形成に関する社会学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 白倉 幸男 (副査) 教授 山口 節郎 教授 厚東 洋輔

論文内容の要旨

かつてエスニシティ研究は、差別論の小テーマでしかなかった。それが、ここ数十年のうちに多数の専門研究者を擁する研究市場へと急速に成熟するとともに、さまざまな議論と理論化の試みを産み出すまでになったのは、旧来の社会学理論では説明のつかない民族的現象の拡大趨勢によって、社会科学が根本的な理解の様式の再編を迫られたからにほかならない。マルクス主義的な予測も、機能構造主義的な視角も越えて出現した、エスニック・リバイバルという現実を説明すること、それがエスニシティ研究の動因であり、根元的な問題関心であった。

しかしながら、エスニシティ研究の諸理論、とくにその形成原理に関する理論群は、これまで実証的な側面から十分に検証されているとはいえない。エスニシティ研究の根元的な問題関心が、先行する現実への対応にあるとするならば、これは大きな矛盾であると言えるだろう。

日本のエスニシティ研究もこの矛盾と無縁ではない。むしろ、アメリカに比べて問題はより顕著にあらわれているように思われる。たとえば、アメリカでは社会階層論が例外的にエスニシティを実証研究の射程に含んできたが、日本の社会階層論は、データ収集上の制約があったとはいえ、まったくといってよいほど民族的階層化の問題を取り扱ってこなかった。

日本のエスニシティ研究におけるこうした現況は、単に実証研究が不足しているという問題だけでなく、なぜ日本でエスニシティを研究するのかという主体性の問題さえ惹起しかねない。

本論文の主たる目的は、以上のような問題状況を考慮し、在日朝鮮人を対象とした調査データを用いることによって、エスニシティがいかにして形成されるかという根元的な問いに実証的な側面から一つの回答を提示することである。在日朝鮮人を調査対象にするのは、日本におけるエスニシティ研究の主体性にかかわる問題だからというだけではない。在日朝鮮人は、民族的マイノリティのプロトタイプという特徴を備えているため、たとえばアメリカのように多民族状況にある地域の民族的集団よりも、エスニシティの形成を論じるにあたって問題を特定化しやすいためでもある。

第一部では、欧米や南米の民族集団を対象に構築されてきた既存の理論群について、エスニシティの構造と動態、すなわち本質論と形成論という視角を導入することによって、従来の学説的理解の問題点を指摘するとともに、新たなエスニシティ研究のアプローチを提起した。

従来、エスニシティおよびエスニシティ形成に関する理論については、4つの理論群を相互に対立的なものとな

す学説的理解がとられてきた。すなわち、古典的理論として「同化理論」があり、情緒的側面からエスニシティの永続性を強調した「原初主義理論」がそれを批判する形で登場し、文化的分業による剥奪感からエスニシティが反動的に成立するとした「民族的反動理論」がその両者の批判から提起され、さらにそのすべての理論群に対抗しながら社会的資源をめぐる競合によって合理的にエスニシティが動員されると主張する「民族的競合理論」が登場してきた、という理解である。

しかしながら、各理論群によるレトリック上の批判にもとづく対抗関係をいったん留保して命題レベルで子細に検討することによって、エスニシティの本質論は、「関係性」——同胞集団への愛着と、それに関連する同胞集団との紐帯——にかかわる命題群と、「主体性」——民族集団への意識的な同一化と、探索・創出過程を内在するエスニック・アイデンティティの昂揚——にかかわる命題群とに分節化されることを指摘した。そして、エスニシティの形成論は、「同化・反動論」「原初主義理論」「民族的競合理論」という3つのパラダイムないし命題群として把握すべきであることを指摘した。

つづく第二部では、在日朝鮮人を対象としたものとしては歴史上初の全国サンプリング調査である「1993年在日韓国人青年意識調査」のデータを用いて、社会階層、民族教育、差別と自尊心、民族団体などの具体的なトピックを取り上げながら在日韓国人青年の生活構造を論じた。在日韓国人青年の特性を広角度から論じるというだけでなく、本論文における実証部の根幹とも言える第三部の分析に必要な不可欠な変数群をとりあげ、それらの分散共分散の構造と動態を概観している。

そして第三部では、同調査から特にエスニシティに注目して、その構造と動態を実証的に論じた。ここでは、エスニシティを「民族的な求心力に起因する態度、意識、行為の総体を包括する志向性」とみなし、包括的かつ多元的な測定指標をもちいている。

まずエスニシティの構造については、(1)在日韓国人青年のエスニシティは、2つの志向性に分節化して把握すべきであること、(2)2つの志向性とは、民族的な問題を意識し、それを解決していこうとする主体的な志向性（主体志向的エスニシティ）と、情緒的に民族的なものとの紐帯を求めようとする関係的な志向性（関係志向的エスニシティ）であること、(3)主体志向的エスニシティと関係志向的エスニシティは、相互に別種概念であると規定しうるものであると同時に、非常に高い親和性を持ちあわせたものであること、を発見した。これらの命題は、第一部で示唆した理論的予測、すなわちエスニシティの本質は関係性と主体性によって理解されるべきとする視点は、在日韓国人青年について妥当であったことを意味する。

次いで、エスニシティの形成についての分析からは、以下のような命題が発見された。すなわち、(4)関係志向的エスニシティは、家庭内で大きく継承され、一部、民族団体への参加によって獲得されること、(5)主体志向的エスニシティは、家庭内外での教育を通して、また、民族団体への参加によって、大きく獲得されるものであり、家庭内で直接継承される部分はあまり大きくはないこと、(6)出身階層、成育地域内同胞数、被差別体験は、在日韓国人青年の民族的アイデンティティ形成にまったく、あるいはほとんど影響力を持たないこと、である。これらの命題は、在日韓国人青年のエスニシティ形成に関して、「同化・反動論」はいちじるしく説明力を欠いていること、そして、「原初主義理論」および「民族的競合理論」も部分的にしか適合しないことを意味する。

こうした検討によって、従来の理論的見解とは異なるあらたな説明様式が必要との判断にたち、いくつかの分析を行ったところ、在日韓国人青年のエスニシティとは——関係性と主体性、伝統の継承と獲得、因習主義と革新的態度、そういった両義性のバランスのうえに成立する志向性だ、と結論づけられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は在日韓国人青年のエスニシティ形成に関して、経験的な社会調査データに基づいて分析を行なった実証的研究である。わが国でも国際化が次第に進むと予想される日本社会への示唆を与えるものとなっている。

本論文は三部に分れる。第一部で、著者はエスニシティを「民族的な求心力に起因する態度、意識、行為の総体を包括する志向性」として定義し、海外の諸研究を検討し、エスニシティを測定するための手法の得失を論じた上で、

他の手法も加味した上で行動重視アプローチを採用し、1993年に在日本大韓民国青年会の名簿から等間隔抽出した18～30歳の1723名を対象に調査を行ない、46.4%、800名の回答を得た。帰化した者や朝鮮籍の者は含まれていないが現在得られる最良のデータといえる。

第二部では生活構造が明らかにされる。父世代では約7割が零細企業や自営業を営むのに対し、本人世代では教育レベルで、在日韓国人と日本人で差がみられず、一般従業員も6割を超えているなどの開放化を見いだした。また、家庭での儀礼や行事を通した生活様式の伝達は広範に見られるが、母国語の修得度は低いことが明らかにされた。さらに、民族団体への参加には性別や階層はまったく効果を持たないこと、約4割がなんらかの差別体験を持つことなどの事実を解明している。

第三部では、エスニシティの構造についての確証的因子分析による知見が示される。第1因子として、母国語能力、民族的書籍の参照度、祖国統一など知的関心の側面にかかわる「主体志向エスニシティ」、第2因子として、同胞との交友願望、同胞との結婚志向など紐帯を求める「関係志向的エスニシティ」が抽出された。またパスモデルによる分析では、被差別体験が相対的剥奪感を生み、それによって主体志向や関係志向が強まり、他方、被差別体験は民族的劣等感を生み、関係志向が弱まることも明らかにされた。

実証的調査データに基づいて筆者は精緻な分析を行ない、在日韓国人青年のエスニシティ形成の解明について新しい試みを行なってきた。エスニシティ形成についてはまだ残された仕事があるが、著者の理論的、実証的研究が真摯に積み重ねられており、学問的貢献が大きいと評価できる。以上のことからみて、本審査委員会は、本論文がエスニシティに関する実証的社会学研究として高く評価でき、博士（人間科学）の学位授与に十分に値する研究であると判定した。